

東日本大震災津波伝承館運営協議会の開催結果(概要)

1 開催概要

- (1) 日 時 令和元年10月21日(月) 15:00~16:30
- (2) 場 所 国営追悼・祈念施設管理棟(道の駅高田松原) セミナールーム
- (3) 出席者 委員8名(3名欠席)(別紙のとおり)
- (4) 審議事項
東日本大震災津波伝承館の令和元年度における事業及び今後の方向性について

2 会長・副会長の選任

- (1) 会長(委員の互選) 南 正昭 委員(岩手大学理工学部教授)
- (2) 副会長(会長の指名) 柴山 明寛 委員(東北大学災害科学国際研究所准教授)

3 審議概要

各委員の発言要旨は次のとおり。

○伊藤雅人委員(一社・マルゴト陸前高田代表理事)

- ・ 特別支援学校等の子供たちを誘致する取組を進めているが、点字による解説がない。常設展示の更新の際は、できるところからでも対応して欲しい。
- ・ 学習プログラムや教材についても、特別支援学校の児童・生徒でも学びやすい内容とする工夫が必要。
- ・ 震災から9年目を迎え、震災の記憶のない、又は記憶の薄れている子供たちが多く、興味や関心が薄れている。無理やり伝えるやり方だと伝えられない。興味や関心を引くよう企画展示やイベントの工夫が必要。
- ・ 人と防災未来センターでは修学旅行生以外、客が入っていない状況。このままだと同じ轍を踏む。
- ・ 3.11伝承ロードについては、数年後は小学生もスマホを持ち歩くようになると思うので、スマホでも見られるようにして、クイズに答えるなどできるよう検討して欲しい。
- ・ リピーターを増やすには、市民や陸前高田市に関わる団体や学生などが集まり、毎月何らかの企画を一緒に考える方法が考えられる。その人たちも発信してくれることで来館者やファンも増える。

○五味壮平委員(陸前高田グローバルキャンパス(岩手大学人文社会科学部教授))

- ・ 展示には変えられる部分と変えられない部分があると思うが、リピーターを増やすには、この変えられる部分、企画展示などをいかに工夫できるかが大事。このため、地元の市民と触れ合える、出会える空間を提供したり、来館者を市内外に誘導し、そこで人と出会えるような企画展示やイベントを実施してはどうか。こういう「変えられる部分」をいかに市民との協同により作っていきけるかが大事。
- ・ 来館者の避難訓練の体験を伝承館のコンテンツにしていくことも大事。サプライズ的に実施し、いざ緊急の混乱の中で、どういったパニックや心理的な戸惑いがあるか知っていただくことも大事。
→南会長) 避難訓練の企画化は素晴らしいことであり、ぜひ公園の運営協議会とも相談しながら進めていただきたい。

○金野靖彦委員（陸前高田市観光物産協会会長）

- ・ 「進化」していくことが大事。このため、世の中に追いついていくとともに、自分たちからも変化していかないと活性化しない。
- ・ 例えば「いのち」は、大事、尊いとどこでも教えるが災害を通して感じるのは「耳にタコ」式になっていること。これからは「いのちとは何か」と問いかけてみるべき。そのためには根拠のない「大丈夫」は言わないこと。
- ・ 「安全・安心」と言った場合、安全がしっかり確立されて安心につながるが、安全もいずれほころびが出て変えていく必要があるのだから、考え方としては、物事は「安全・安心」ではなく「いのち」から出発すべきであり、もし考えられるならば、「いのちに対する挑戦」ということについて、どうしたらこういう所の面白さが生まれて、伝えていけるか検討することも大事。

○千國亮介委員（岩手県立大学総合政策学部准教授）

- ・ 常設展示についても、復興までの道のりの部分をしっかりとアップデートしたり、実際に足を運ぶことでリアルさを感じられる、被災した実物の展示などを更新することで、リピーターの増加につながる。
- ・ 震災伝承ノートの活用は大事。学んだことをまとめるとともに、それぞれのゾーンの段階でどう感じたか「思い」を書きとめられる記入欄を設けたり、最後のまとめの仕方でもあらかじめ整理してあげて書きやすくするような工夫も大事。
→南会長）最後に「まとめて書いてください」ではなく、学びの階段のように、その都度書きとめていくイメージかと思う。
- ・ 常設展示では、国内外の津波以外の自然災害が発生する恐れのある地域に住む人に対しても、一般的な教訓を引き出せるような展示がさらにあるとよいと感じた。

○千田 貴浩委員（岩手県立博物館副館長）

- ・ 来館者の様子を見てみると、どの人も非常に真剣に、かつ興味深く見ているようだ。
- ・ お客様の興味を絶えず吸収し、実現していくことで進化する施設となればよい。類似施設を視察すること、お客様のちょっとした声も聴くこと、それを可能な限り行動に移すことが基本であり、そこからアイデアが生まれることもあるので、そういう所を大切にしたい。
- ・ 施設を設置した効果や成果は何かと、よく聞かれると思うが、来館者数の把握のほか、実際にどういう効果があったか、追跡調査を試みるのもよいと思う。

○平井 省三委員（(公財)さんりく基金三陸DMOセンター長）

- ・ 特に県外や国外から多くの人に伝承館に来ていただくため、展示等の企画の中身も大事だが、三陸沿岸や岩手、陸前高田のコンテンツとの組み合わせも重要になる。例えば、伝承館の「復興を共に進める」というテーマの中で、来てくれる方々に、これからの陸前高田の復興に参加しているという意識を持っていただけるような体験型のコンテンツを作っていくことも大事。どちらかという、これは私たち（観光関係者）の仕事であり、頑張っていきたい。

○松村 敦子委員（(元)赤崎中学校校長）

- ・ 伝承ノートは、手に持てるサイズでとても良いと思うが、児童・生徒の年齢に関わらず一緒の内容だと活用しにくいのではないか。伝えたいことはたくさんあると思うが、小学校低学年については、クイズ形式など親しめるような要素があってもよい。
- ・ 県内、特に気仙地区の小中学校、高校に足を運んだり、県内の学校長会議において、伝承館を紹介すれば、学校関係の来館者が増えると思う。学校では2月から年度初めにかけて年間学習計画を固めるので、できればその前、ちょうど今の時期が来年度に向けて適期である。
- ・ 津波発生時等の来館者の避難誘導が大事。いのちを守る意識を育てようとする伝承館として、初めて来館した方などと避難路を一緒に歩いてみる企画はどうか。参加者の声を聴きながら、避難方法の在り方を考えることも大事。

○南 正昭会長（岩手大学理工学部教授）

- ・ 震災の伝承はこれから息長く、いかに効果的に続けていくかが課題
- ・ 来館者の気持ちや希望を聴き、来館者と対話しながら回していく、改善していく、世界とか大学、関連施設とも会話しながら、アクションにつなげられるようにしていければよい。
- ・ 大きな目的に向けて、委員の意見についてもできることから着実に反映されていく姿が見えるとよい。学校回りやバリアフリー、来館者の多様性の対応など、定期的に、時機を逃さず、小さな改善を続けていくことが大事。
- ・ 市民協同としては、企画展示の「企画」の中で、協同ができればよいし、単発のものでなく継続性のある、進化させる仕掛けがあればよい。例えば「いのち」をテーマにするとか、目指していく大きな目的があればよい。大きな目的で皆さんがまとまっていければよい。
- ・ 大学としては、展示の基本計画にもあるが、先端的な学術研究の情報を展示したり、防災学習プログラムを展開するとか、学会のシンポジウムをやるとか、伝承館との連携主体として、陸前高田グローバルキャンパスも含め、一緒にやっていけるような場面も作っていくようになると思う。委員それぞれとの多様な連携の中で、素晴らしい施設を作っていければと思うので、よろしく願いしたい。